

ウチ<sup>ソト</sup>内・外 の 視 点  
— 指示詞ソの機能を中心に —

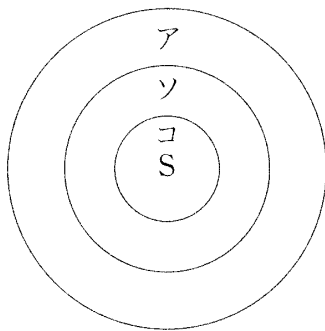
新 里 勝 彦

## 0. はじめに

日本語の指示詞「コ・ソ・ア」についてはその体系性がかなり明らかにされている。話し手を基点にして指示対象との遠近によって“近称・中称・遠称”とする伝統的な見方、話し手、聞き手、それ以外の領域を指し示すとする佐久間説、また、指示空間をコとソ、コとアに分ける三上説、さらに、それぞれの説に補足と修正を加えた複数の修正説がある。いずれも、コ・ソ・アの体系性の解明に迫っていて、特に「ソ」の機能の扱いでさまざまな解釈が試みられている。その試みは主に佐久間説と三上説から漏れる言語事実についてなされているが、必ずしも、満足のいくものではない。

そこで、本稿ではこれらの主要な説と修正説のいくつかを概略し、同時にその問題点を指摘し、とくに、「ソ」の指示機能について新たな角度から考えてみたい。さらに、その考え方を this と that の指示性の解釈にまで敷衍してみたい。

1. 佐久間説。話の現場で話し手を基準に最も近いところを「コレ」、少し離れたところを「ソレ」より遠いところを「アレ」で示し、話し手とその指示対象との距離の順にコ・ソ・アをあてる。図1はいわゆる近称・中称・遠称という伝統的な考え方である。



(ただし、S = 話し手)

図 1

このような考え方に異をとнаえて提唱されたのが佐久間説である。コ・ソ・アは、単に、話し手と対象との距離の差異を示すだけのものではなく、むしろ、話し手および聞き手を中心とした空間とそれ以外の空間を指すと考えべきもので、三者の相対的な関係を表す役割を担うものとした。

話の現場では話し手と聞き手は向い合う位置にあり、それぞれの位置を中心に指示空間ができる。その指示空間を“なわばり”と呼ぶ。そこで、人、物、場所、方角などの指示対象が話し手の“なわばり”にあれば「コ」の系列で、話し相手、すなわち、聞き手の“なわばり”にあれば「ソ」の系列で、両者の“なわばり”の外であれば「ア」の系列で指示される。つまり、話し手と聞き手は両極をなし、それぞれが指示領分をもち、その領分外をひとつの領域と見なす。これまで、副詞とか連体詞と呼ばれていた語群が語頭のコ、ソ、ア、(ド)によって三つの系列に分類される。これによって、日本語の指示詞は体系づけられ定説となる。<sup>1)</sup>

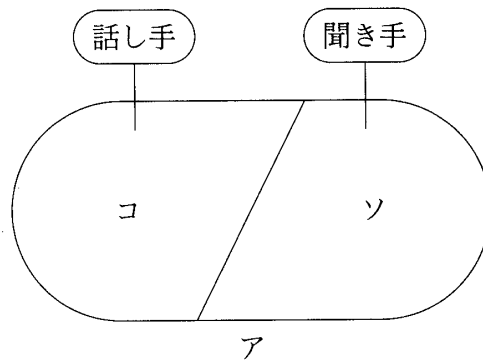


図 2

さらに、指示する側と指示される対象、すなわち、人、事物、場所、方角などの相互の間には次のような対応関係が成り立つと見た。人称と指示領域との対応関係を整えたのである。<sup>2)</sup>

	指示されるるもの		
	対話者の層		所属事物の層
話し手	(話し手自身)	ワタクシ ワタシ	(話し手所属のもの) コ 系
相手	(話しかけの目標)	アナタ オマエ	(相手所属のもの) ソ 系
はたのもの・人	(第三者)	(アノヒト)	(はたのもの) ア 系
不定		ドナタ ダレ	ド 系

2. 佐久間説の射程。実際の話の現場で、佐久間説を肯定する例をあげる。

(1) 「あなたそこにいたの？」

「ああ、僕もここで少しうつらうつらしていたんだ」

堀辰雄「風立ちぬ」

(2) 「そっちのって」

「これ？」

「うんそれ」

倉本聡「北の国から」

(3) 「あれが大島なんですね。」

「あんなに大きく見えるんですもの、いらっしゃましね。」と踊り子が言った。

川端康成「伊豆の踊子」

佐久間説に準ずる理想的な例である。(1)の例は、「あなた」と「そこ」、「僕」と「ここ」対応して、「対話者の層」である人称と「所属事物の層」である指示詞の働きとの間に矛盾がない。(2)の例は話し手と話し相手がそれぞれの支配空間を「これ?」、「そっち」、「それ」で表している。さらに、(3)の例では話し手とその相手の“なわばり”外に見える「大島」を「あれ」と「あんな」で指し示している。したがって、図表に示されているように“なわばり”の違いがコ、ソ、アで指示されている典型的な例といえる。話し手と聞き手が対立拮抗している場面であってそれぞれの守備範囲がコ、ソ、アで示されているからである。

3. 佐久間説の反例。図2や図表に明示されたような解釈にもとる事例、つまり、佐久間説の反例と思われる事例が指摘された。

その一。「対話者の層」の人称と「所属事物の層」を表す指示詞が一致しない。

- (4)「ぼくのその傘とってこないか」  
「これ? この赤い傘が君の?」

その二。話し手の領域にある事物がコではなく、ソで指示される事例も指摘された。たとえば、「話し手と聞き手とが部屋の中で立ち話している時、話し手が手を後へやって机をさし」次のようにいう。

- (5)「その机をごらん」

その三。聞き手の指示範囲にある物であっても、話し手側からコで指示し得る場合があったり、逆に、自分自身の身体の一部でありながら、コではなくソで指示し得る場合がある。

- (6)「このスーツはなかなかいいじゃない。」  
「このスーツだけなんだから。君がほめてくれるのは。」

- (7)「痛いのはここ?」  
「もう少し上の方」  
「ここかな」  
「え、そこ、そこです」

その四。話し手も聞き手も同一の位置や場所に在りながら、聞き手のいるはずもない所をもくしてソの系列で応じる例がある。

- (8)「どちらまで」

「ええ、ちょっとそこまで」

(9)「右に曲がって」

「その角を左へ」

吉行淳之介 「夕暮れに」

(5)は聞き手の勢力圏内ではなく、あきらかに話し手の“なわばり”にあるものがソで指示されている。図2の意図する佐久間説から外れる例だと言える。とくに、(7)の例は話し手（医者）と聞き手（患者）が同心円内に在って、しかも同一の箇所をコとソで指示している。さらに、(8)は同一の場所において話し手と話し相手はあいさつを交わしているのだから、「そこ」に聞き手を想定するのはたしかにおかしい。(9)は車中で運転手に行き先を指示している。「その角」と指示された所に聞き手がいるわけではない。

4. 佐久間説の補修説。佐久間説からはずれると思われる先の事例についてさまざまな解釈がなされている。その一つに高橋説があげられる。<sup>3)</sup>

図2の佐久間説では話し手と聞き手が向かい合ってそれぞれの指示領域をもっている。この図式のままで聞き手が話し手に接近して話し手の領域を包みこむような状態になったとき「話し手のうしろ」の机をさして「ソノ机」といえるという。さらに、話し手と聞き手が接近して、ついに同じ位置に重なる時、佐久間説と“近中遠称”説は「完全」に「一致」とみる。このことが次のように図説される。

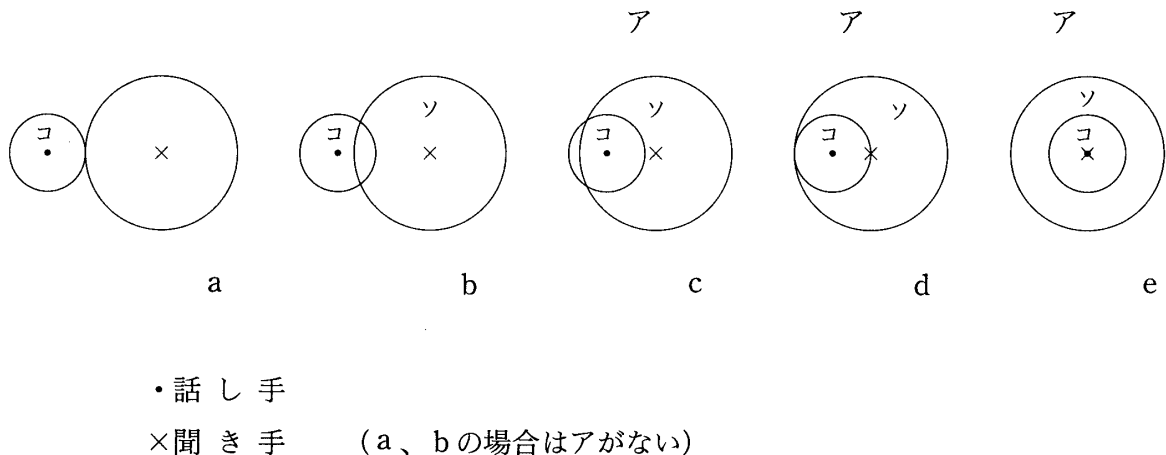


図 3

この解釈には無理がある。一つは、佐久間説の現場指示のソは話し手が聞き手の存在を意識したときにのみ生ずる指示表現であり、話し手からの距離を示すものではない。したがって、話し手からの距離を表す“近中遠称説”のコ・ソ・アの体系のソとは指示機能が違うとみるべきだろう。

例えば、二階のベランダから眼下の自分の車庫の近くに無断駐車されている車をみて、

「アノ車、誰のだろう。アンナ所にとめて、全く迷惑千万だ」  
と思っているところへ、どこからともなく車の持主らしい者が現れて、車のドアに手をかける。  
「ソノ車はお宅のですか。ソナ所にとめられては迷惑ですよ。」  
と迷惑駐車に不快感をあらわにする。

持主が現れる前の「アノ車」が持主が現れた後は「ソノ車」となり、「アンナ所」が「ソナ所」となる。遠称であるアが中称のソにかわったのではない。聞き手の存在が意識されたときソがあらわれたのである。つまり、聞き手の領域を、この場合、聞き手の所有物を指してソと指示しているのである。迷惑駐車を指すのに「アノ～」から「ソノ～」に指示詞をかえたのは話し手からの距離に因るものではなく、聞き手がそこに表れたからである。つまり、アで指示される距離にあるものでも、その位置や距離に聞き手の存在が認められるときソの出現が起こり得るということである。したがって、高橋説（図3）のような解釈ではソの本質的な機能はとらえられない。というのは、ソの機能は話し手から距離の遠近であられる性質のものではなく、話し手が聞き手との関係をどう意識するかによって決まってくる性質のものだからである。

5. 三上説。話し手と聞き手の関係概念でコソアの機能をみるのであれば、コとソ、コとアを二つの側面からとらえる三上説のほうがより説得力がある。

「相手と話し手との原始的な対立の様式が楕円的である。両者は楕円の二つの焦点に立ち、楕円を折半してめいめいの領分として向かい合っている。楕円の外側は問題外である。言い換えると、ソレ対コレの立場ではアレはまだあらわれない。眼を移すと、二人は差向から肩を並べる姿勢で接近する。相手と話し手とは「我々」としてぐるになり、楕円は円となる。これは心理的な問題として言っているのだから、二人が依然相当な距離を保って向かい合っている、話題が手もとの事物に無関係になったら楕円は円に変わる。相手自身は消えることはないが、「ソレ」の領分は没収されてしまう。円内はコレ的で円外がアレ的である。」<sup>4)</sup>

これを図示すれば、次のようになる。

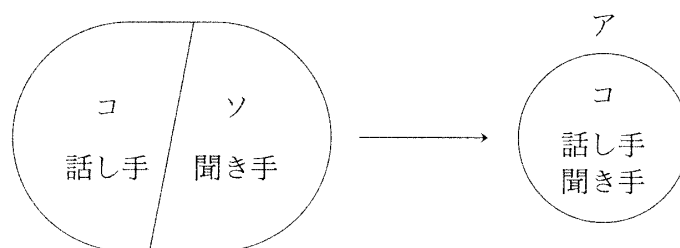


図 5

コとソ、コとアの対立を異質で異次元のものとして捉えている点で先の高橋説と違う。「楕円的」空間とは話し手と聞き手が対峙したときに起こり、佐久間説でいうコとソの「なわばり」である。

「円」的空間は話し手と聞き手が心理的に合一するとき、あるいは、距離的に近接したときに起こり、話し手と聞き手の指示領域が重なり、コとアで指示される空間ができる。これは、本質的には、後で述べる話し手自身の独白のコとアの世界と同じである。

先の高橋説は基本的にはこの「円」的空間のあり方と同じだが、ソによる指示空間の解釈で異なる。つまり、三上説では話し手と聞き手が「我々」という関係になれば、聞き手の領域が「没収」されるのでソの指示性は生じない。結局、コとアの領域しか残らない。ところが、高橋説では話し手と聞き手が接近して同じ位置に重なっても依然としてソの領域が残るという解釈である。ということは、ソの指示性をコとアの対立なかに組み込み、三者とも同次元でとらえているのである。

(6)の例は、「円」的空間での会話として成り立つ。「我々」と言える位置関係ならば、相手の持物（スーツ）でも話し手の指示範囲あるものととらえて「コノ〜」といえる。(7)の例はどうだろうか。医者が患者の患部に触れてココといい、患者は同じ部所をソコと答えている。この現場は明らかに「円」的な場面である。ならば、コとアの領域だから、ソの出現はおかしい。

そこで、医者のココと指示したところを医者の方の“なわばり”とみなせば、患者側からはソで指示される領域という解釈がなりたつという。つまり、円的場面の解釈に楕円的場面のソの指示機能を持ち込んだ考え方である。これも無理な解釈である。なぜなら、少なくとも、距離的には話し手も聞き手も相互の指示領域が重なる場面、すなわち、円型の場面にあつて心理的には楕円型の場面におけるコとソの対立の解釈をとっているからである。

6. 問題のソ系列。(7)の例に限らず、(8)、(9)の文例のソの機能については新たな視点による解釈が求められる。これらの例はコとソが対立しない円型場面でのソの出現の問題である。この種のソは合理的な解釈が施せないために、次のように「例外」、あるいは、「変種」扱いされている。

「『そ』系列の指示詞は、現場にあるものを指示する場合には、原則として現れない。例外として、近くでも遠くでもない距離にある要素を指すときに、「そこ」や「その辺」などが場所の名詞句に関して使われるだけである。」<sup>5)</sup>

「『そこ』で指される場所が話し手と聞き手の視野の中に存在していないけれども、あたかも話し手と聞き手の中に視野の中に存在するかの如く表現する現場指示用法の一変種と考えてよい…」<sup>6)</sup>

この「例外」、あるいは「変種」扱いされているソ系列の指示詞の機能に合理的な解釈を与えるには、ソの機能の出自から考え直すべきである。

7. 独白の指示空間。まず、ソという指示詞は他のコやアとはその現れ方が違う。話し手にとって眼前にひろがる指示世界は自分に近い周辺であればコで指し示され、その周辺以外であればアで示される。このことは、話の現場においての指示の場合も、観念の世界での指示においても同

じ原理が働く。話し手自身の自問自答の世界を想定すれば領けることである。例えば、次の例は電車の中で自分の前に腰掛けている人を順に眺めながら一人想像している場面である。

「あの人は、いくら預金をもっているのかしら。小汚いふりをしているけど、あいう人は案外、小金をもっているもんなのよ。

隣の学生—あ、これはないな。あるとすれば、下宿のおばさんに借金だわ。」

向田邦子「眠る盃」

この独り言の世界は次のように図示できる。

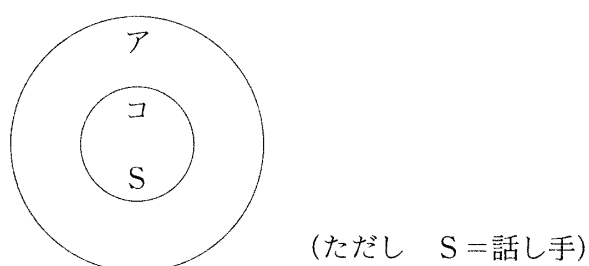
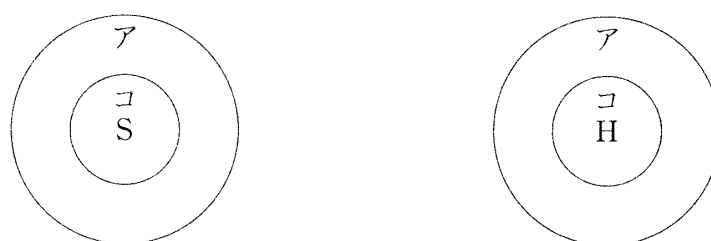


図 6

前述の三上説の円的場面と同じようにソの出現を要しない場面である。この図式を使って話し手と聞き手の指示領域のあり方を考えてみたい。

話し手のコとアの世界に対して聞き手の世界も同様に円型である。つまり、話し手と聞き手はそれぞれが独立の円型の空間の中心にあって、コとアの世界をもっているわけである。



(ただし S = 話し手、H = 聞き手)

図 7

そこで、相互の存在を意識し、相互の世界を指し示すときにソという指示詞が登場する。話し手から聞き手の支配空間を、聞き手から話し手の支配空間を眺めるとき、それぞれの空間がソで指し示されるのと考えることができる。



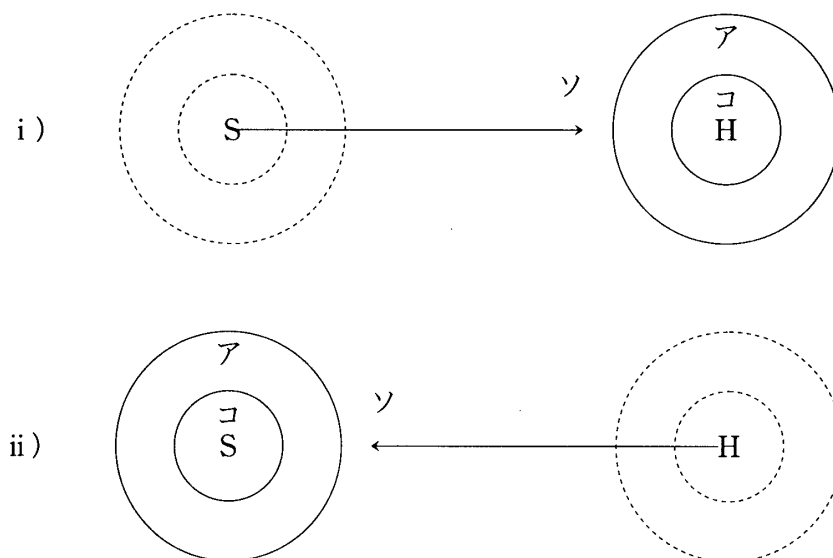


図 8

8. ソの二つの機能。これでわかることは、話し手と聞き手のそれぞれの世界は相手の位置からはソで指示される領域である。それぞれの領域は話し手と聞き手のそれぞれが外の視点に立つときソで指示され、内の視点に立つときコかアで指示されることがわかる。これにより、コとアの領域を外側から見るとき、出現するのがソであると仮説をたてることができる。その場合ソの機能として二つ考えられる。一つは、図8から分かるように話し手と聞き手がそれぞれの視点に立って相手の領域を指示する場合である。つまり、佐久間説、あるいは、その延長線上にある三上説の楕円型におけるソである。あと一つは、話し手、あるいは、聞き手がそれぞれの指示空間の同心円の位置にあるとき、その領域を指す外から見る働きをするソである。

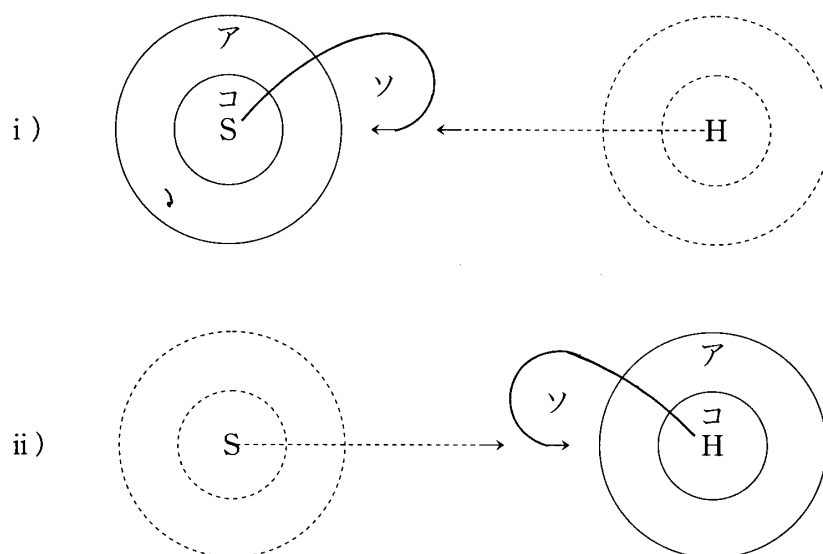


図 9

このような円環的な視点は日本語の自称詞や対称詞によく見られる現象である。特に、親族の呼称ではこの現象が如実で、例えば、自分のことを子供の視点をとって「お父さん」といい、弟妹との関係では「お兄さん」といい、よその子供に対してはその視点から「おじさん」となる。話し相手、すなわち、聞き手の視点による親族呼称である。このような視点の移動による呼称の原理がソの機能にもあらわれていると見ることができる。

したがって、ソの系列による指示は聞き手の領域に対しても、話し手の領域を指す場合にも使われることがわかる。前者(図8-i)は話し手の視点から対峙する聞き手の領域に対して、後者(図9-i)は話し手が聞き手の視点になって自分の領域を指すとき、つまり、話し手が聞き手の視点に沿って自分の領域を指すときに使われるのである。問題のソは実はこの後者のソである。

9. 円環的視点のソ。聞き手の領域を指すソ、すなわち、楕円の場面におけるソは理解しやすいが、話し手の領域を指すソは円環的な視点となっているので理解しづらい。しかし、話し手と聞き手が「我々」の関係となる円的場面、つまり、コとアの指示詞しか現れない場面で、実際にはソが現れる言語事実に対してはこの円環的な視点という考え方で合理的な解釈を与えることができるのである。

(5)の例はまさしく円的場面でのソの問題である。これは次ぎのようなモデルで解釈が可能となる。

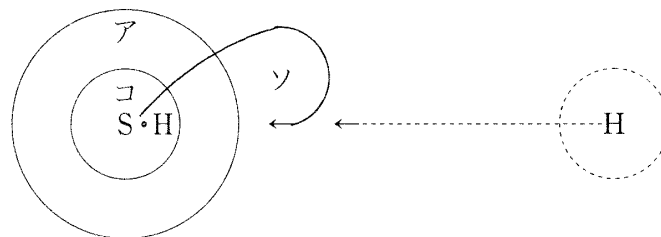


図 10

これは、さきの図9の解釈モデルと同じだが、話し手と聞き手が同じ位置にあり、「我々」の関係を保ってコとアの世界に身をおいている点で違う。つまり、聞き手の存在が含まれている世界なので、図9の解釈モデルのような話し手だけの自問自答の世界ではない。しかし、「我々」を中心に作られる自他の空間を外の視点を表すソで捉らえている点では同じである。したがって、ソの解釈も同じである。この解釈モデルを是とするなら、問題のソの用法には「例外」も「変種」もなくなる。それでは、問題のソの事例を見て行こう。

(5)は話し手の守備範囲にある対象である机が「ソノ～」で指示されている例である。これは話し手と聞き手が合体した円的場面を円環的な視点、すなわち、外の視点のソで話し手の領域をとらえ直しているのである。(7)の例にも同じ解釈が施される。医者と患者が同じ位置にあって、同じ患部を話し手である医者はココといい、聞き手である患者はソコと答えている。この場合も医

者と患者は円的場面であって、ココと指された患部を患者は相手の視点に沿ってソコと答えている。相手の視点とは聞き手の視点のことであり、ここでは、円環的な視点、つまり、外の視点である。(8)の例も場面は同じく円的場面である。「ちょっとソコまで」の「ソコ」はそういつている話し手には既知の場所であり、観念のなかにある場所である。言い換えると、話し手には既知の“領域”であるが、聞き手には未知な所なので当然ソで指示される領域である。そのソで指示される話し手の領域を聞き手の視点の採って話し手は自分の領分、この場合は自分の行く場所を「ソコ」と答えているのである。

この解釈は(9)にも適用される。「その角を左へ」といわれた時の「ソノ角」は運転手には未知な場所である。しかし、指示した客には既知の場所である。話し手の“領域”にある既知の場所は聞き手からみればソの指示を受ける領分である。ソで指示される話し手の領分、この場合、「曲がり角」を話し手は聞き手の視点によって「ソノ角」と伝えたのである。

図9の解釈モデルは話し手自身の自問自答の世界なので、話し手が自分の世界を内側から見た場合、指示空間はコとアで示される。しかし、このコとアでしか示されない領域も外側からみればソの出現はありうる。特に、観念の世界ではコとアだけでなくソが現れる。話し手の独白的な世界でソが現れる現象はやはり円環的視点という新たな考え方を採れば説明が容易となる。

「あの時ああすればよかったという自分を責める気持ちが自分がなぜそうしなかったのか、そうしなかった、或は、そうできなかった自分はいったいどういう人間なのか…」

谷川俊太郎 「散文」

「アイツヲ呼ンデ来テ、ソイツ（つまり、アイツ）ニヤラセテミルカ」

三上章 「現代語法新説」

これらは文脈照応の例である。「あの時ああすればよかった…」という話し手しかわからない内なる回想を外の視点のソでうけることができる。勿論、上の文では内の視点だけにとどめた表現も可能である。つまり、三箇所「そう」をすべて「ああ」にかえても文意はかわらない。しかし、ソで表現するとある種の客観的な響きがでる。それは、コやアの指示世界を外から指示する機能がソにあるからだといえる。

10. 聞き手の視点と話し手の視点。久野はソの機能の二面性を次のようにまとめている。

「ソー系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。」<sup>7)</sup>

まず、前段の『話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合』に用いられるソとは、まさに、図9の解釈モデルのことであり、円環

的な視点によるソの用法の説明である。また、後段の『話し手自身が指示対象をよく知らない場合』といえ、聞き手の領域のことであり、当然、聞き手の領域に向けられた視点によるソであることがわかる。佐久間説のソであり、解釈モデルの図8-iにおけるソの解釈である。

結局、話し手の“なわばり”にはコとアで指示される内側の世界があり、その世界を外側から指し示すソがあると見ることができる。したがって、話し手は自分の“なわばり”を相手の視点を採ってソで指す場合と相手の“なわばり”をソで指す場合があるわけである。要するに、ソの機能には“聞き手の視点”を示すものと“話し手の視点”を表すものがあるといえるのである。つまり、ソだけは話し手の眼が外の世界に向けられたときも、(話し手自身の)内の世界に向けられたときにも用いられることがわかる。この原理は図10のように話し手と聞き手が円的な場面にあってもいえることである。

11. **ソの機能の異質性。**ソの機能はコとアの役割とは異質である。コ・ソ・アの指示詞は同次元、あるいは、並列的に扱うには問題がある。コとアは固定的で一義の働きしかしてないが、ソの働きは視点の移動性がある一義的ではない。また、コとアの視点は話し手なら話し手のものとして固定しているが、ソの視点は話し手と聞き手の二元性をもっている。このことが、図8、図9、図10で検証されたのである。さらに、コとア系列が内なる視点でとらえられた世界だとすれば、それを外からの視点でとらえなおすときソが用いられるのである。コとアで示されたものが主観的な響きをもつものに対してソの指示に客観的な響きがあるのはソの外の視点に由来するものといえよう。

12. **英語にはソの視点はない。**英語の場合、話し手の“なわばり”はあるが聞き手の“なわばり”という観念はない。聞き手の存在は意識されるにしても、それは話し手の“なわばり”外存在の一つとしてとらえられている。したがって、話し手の“なわばり”はthisで指示されるが、それ以外はすべて-thatとして考える。その-thatの領分をあらわすのが、thatという指示代名詞である。

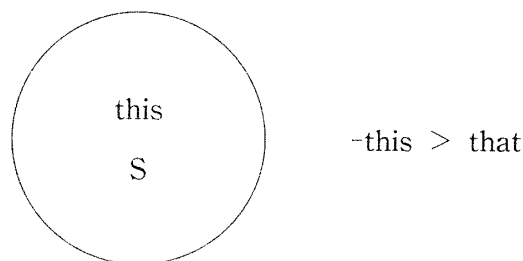


図 11

日本語のコ系列に相当するのはthisであるが、thisの守備範囲以外(-this)はすべてthatであらわされるので、thatは、たまたま、ソ系列とア系列の両方の機能を兼ね備えていることになる。



場合、a)の That is a pen がなぜ「ソレはペンです」と訳出されるのか。図11の構図が理解されてないと that をソレと訳するのにある種の戸惑いを感じてしまう。というのは、that=アレという観念が強く植え付けられているために that に it と同じく「ソレ」という訳語を与えることに違和感をもってしまう。ソレという訳語が it に結び付けられている度合いが強いからである。このことは、(11)の例でもいえることである。

話し手(教師)と聞き手(生徒)の双方から離れた所にある物、例えば、(絵画)を指し「アレは何ですか」(What is that?)と聞けば、「アレは絵です」(That is a picture)と答えるのが日本語の感覚である。ところが、応答例は It is a picture となって、「ソレは絵です」と誤訳が当てられている。it が機械的に「ソレ」と訳された典型的な例である。(12)の例では応答例の(i)の「ソレ」はたまたま that と it に当たるが、(11)例の What is that? に対する応答に「ソレ」ではじまる文はあらわれない。

- |                    |                                    |
|--------------------|------------------------------------|
| (13) What is that? | a) That is a picture. (佐久間説の楕円型場面) |
| (アレは何ですか)          | (アレは絵です。)                          |
|                    | b) This is a picture. (佐久間説の楕円的場面) |
| (ソレは何ですか)          | (コレは絵です。)                          |

(13)の例は佐久間説の楕円型場面における質問なので、二通りの応答が考えられる。一つは、話し手と聞き手の双方から離れた所にある物(壁の絵画)をさして「アレは何ですか」(What is that?)という問いに対して応答は「アレは絵です」となる。さらに、聞き手の領域にあるものに対して「ソレは何ですか」聞かれると、「コレは絵です」と聞き手は答える。このような応答例は両方とも実際には It is a picture という表現となってあらわれる。ここにこの場合の it にソレという訳語を充てると誤答となる理由がある。現場指示の場面を考慮しないで応答文の it を機械的にソレという訳語を与えると、日本語の指示詞の体系の正しい理解の妨げとなる。また、英語文法の参考書に見られる次のようなまとめも問題である。

this	コレ	that	アレ
			ソレ

これまで見て来たように this と that に対応する日本語の指示詞は次のようになるはずである。

this	コレ	that	アレ
	ソレ		ソレ

ちなみに t h i s がソ系列の指示詞に相当する事例は少なくない。電話での応対でみられる例。

This is Ota speaking.

Who is this (speaking)? (ソチラはどなたですか)

And buy a decent suit. You can't come in here looking like this.

(それといいスーツを買うんだ。ソナナ服でここに来るんじゃない)「ウォール街」

このように吟味してくると、(10)および(11)の答で it を「ソレ」と訳出するのは日本語の話者にとってはあきらかにミスリーディングである。しかも不自然である。その不自然さは it を「ソレ」と訳しているからである。それなら「ソレ」という訳語の他にもっと適切な語があるかと反問がでるだろう。しかし、訳語の適切かどうかは実は問題ではない。ここで問題にすべきことは、まず、前方照応としての it の文法的役割である。さらには、日本語の応答で it にわざわざ訳語を与える必要があるかということである。

it は嘘語 (empty word) だから訳出は実は不要である。そのうえ、it を訳出しないのが日本語では自然な応答である。

What is this?	It is a pen.
(コレは何ですか。)	(ペンです。)
What is that?	It is a picture.
(アレは何ですか。)	(絵です。)
(ソレは何ですか。)	

話の現場では this [コレ、ソレ]、あるいは、that [アレ、ソレ] を使って具体的な指示行為がなされている。答える側はその指示行為をうけて指示対象物が何であることを挙げるだけで十分である。それに日本語では指示語をくりかえしたり、明示するのはむしろ不自然である。したがって、英語教育の現場での(10)や(11)の応答の日本語訳は日本語の語感を損なう一因になりかねない。

やはり、it と this や that との文法的な機能と用法の違いを踏まえ、さらに、日本語らしさを考えて訳出すべきだろう。もっとも(10)や(11)の応答例の it に日本語訳をあたえることはないが、(12)や(13)の応答例の指示代名詞の this や that は it のような扱いはできない。つまり、日本語訳を添えなければならない。前者の it は強勢 (stress) の置かれない無標 (unmarked) だが、後者の this、that は強勢がおかれ有標 (marked) だからである。<sup>6)</sup>

### 13. むすび

日本語を外国語として教える際、コ・ソ・アの用法を習得させるのはかなりめんどろなことがある。とくに、英語話者にとってはソ系列の習熟には時間がかかる。日本語を流暢に話すように思える英語話者でもコ・ソ・アの使い方では乱れが目立つ。

それは日本語の指示詞の三系列を英語は this と that の二つの指示代名詞で対応しなければならないからだろう。とくに、ソの用法は日本語の話し手の自己認識のありかたを反映しており、その認識様式の違いを知らなければ、たしかに使いづらいものと思える。

英語の談話はどちらかといえば話し手中心に話題を展開していく。したがって、話の現場では話題や指示対象が自分の支配領域にあるか、ないかを区別するだけである。自分の領域にあるものは this で指示され、それ以外の領域にあるのはすべて that で指示される。つまり、聞き手の領域も、話し手と聞き手の両者の領域外も一つの指示代名詞、that で示されるのである。

日本語の指示詞のソ系列は話し手と聞き手の相対的な関係概念を表すものであり、聞き手の存

在を意識したとき、また、外の眼を意識したときに現れるものである。逆に言えば、聞き手の存在を、あるいは、外の眼を意識しなければソ系列の指示詞を使う煩わしさがなくなる。話し手と聞き手の双方の相対する関係がソ系列の指示詞に反映される。この聞き手志向の日本語の性格を理解してないとソ系列の指示詞を正確に使うのは英語話者には容易ではない。

英語の指示代名詞の that には日本語と異なって聞き手に対する話し手の意識が反映されているとはいえない。話し手の周辺領域とその領分内にあるものが this で、それ以外の領域や対象が that で指示されるだけである。それが、聞き手の領域であったり、それ以外の流域であったりするわけである。つまるところ、日本語のソとア系列の指示詞が英語ではたまたま that に相当するということである。しかし、日本語ではソ系列とア系列の明示が求められるが故に英語話者にとって混同がおこる。逆に、日本語話者にとってはソ系列で訳出される“the＋名詞”や代名詞の it との混同で that は使いづらいといえる。

英語教育の現場ではコ・ソ・アの指示詞の用法がなおざりにされ、英語の指示代名詞や人称代名詞としての it の訳語に不自然な日本語が当てられている。そのためか、日本語話者のコ・ソ・アの使い方にも乱れが生じている。

それはともかくとして、ソの機能や用法にはコやアの系列とは違う観点から焦点をあてた説明が求められる。その一つの試みとしてソの機能を話し手と聞き手の視点から考えてみた。これにより、ソには話し手の視点と聞き手の視点による働きがあることが分かった。さらに、どちらの視点に立つにしてもそれは「外の眼」を意識させるもので、それが結果においてソ系列の語感に一種の客観的な響きを与える要因となっている。

なかでも、とくに、話し手が聞き手の視点を採るという解釈を認めれば、これまで「例外」、「変種」扱いされていたソ系列の一部の事例にも合理的な説明が施せるようになる。

[注]

- 1) 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』 p. 22
- 2) 同書 p. 35
- 3) 高橋太郎「コソアドの原理について」
- 4) 三上 章『現代語法新説』 pp. 177-178
- 5) 田窪行則「ダイクシスと談話構造」(『講座日本語と日本語教育』第12巻) p. 132
- 6) 正保 勇「『コソア』の体系」(『日本語の指示詞』) p. 73
- 7) 久野 暉『日本文法研究』 p. 185



## 参考文献

- 大津栄一 (1993) 『英語の感覚 (上)』 岩波書店
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 大修館
- 小泉保 (1990) 『言外の言語学』 三省堂
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』 恒星社厚生閣
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 正保勇 (1981) 「『コソア』の体系」 (『日本語の指示詞』、国立国語研究所)
- 空西哲郎 (1980) 『英語・日本語』 紀伊国屋書店
- 高橋太郎 (1975) 「コソアドの原理について」 (『言語生活』、1975年1月号)
- 田窪行則 (1990) 「ダイクシスと談話構造」 (『講座日本語と日本語教育』第12巻、明治書院)
- 服部四郎 (1961) 「『コレ』『ソレ』『アレ』と this, that」 (『英語青年』 vol.CV II No. 8.)
- 匹田軍次 (1981) 「指示語コ・ソ・アについて」 (『月刊言語』 vol. 10. No. 12)
- 堀口和吉 (1978) 「指示詞の表現性」 (『日本語・日本文化』、第8号).
- Lakoff,Robbins (1976) “Remarks on this and that” (『海外英語学論叢’76』, 英潮社)
- Halliday,M.A.K.(1993) Functional Grammar、2nd.Ed., Edward Arnold

付記：本稿は本学の平成5年度の「特別研究費」を得てまとめたものである。